

藤田浩子の 少し昔のこと 〈80〉

配給制度

隣組で配る配給制度のことをもう少し書きます。「配給制度」というのは、戦争で食料や生活物資が不足してきたので、国が考えた制度です。

1941年から始まったそうですが、もともと戦争で食料や生活物資が足りなくなったのに対処する政策でしたから、十分な量が配給されるわけはありません。私の家にもありましたが「米穀通帳」という通帳に家族の人数などを書いて、それに基づいてお米の割り当てがあるのです。原則として大人1人2合3勺が割り当てられました。2合3勺なら充分じゃないかと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、パンも麺類もあり副食もある今の食事とは全く違って、それしかないわけですし、それもしばしば芋や豆などの代用品に変えら



れるのですから、足りるはずがないのです。ですから農家や闇市に行ってお米を「闇」で買ってきます（見つかると没収されました）。お金はいつ変動するかわからないので、物々交換にしか応じない農家もありました。我が家も母が嫁入りの時に持ってきた着物や反物は全てお米や麦などの穀類に変わりました。揃いの食器も掛け軸も食料に変わりました。手もちの物をひとつひとつ手放して、まるで竹の子が竹の皮をはいでいくようだというので、そういう生活を「筍生活」といいました。空襲で焼け出された家族は交換する物もなく気の毒でした。

お米だけではありません。味噌も醤油も砂糖も塩も、マッチもたばこもお酒も炭も傘も靴も服も、みんな配給でした。決められた量しか買えなかったのです。それでも隣組全所帯の分があればいいのですが、数が足りなければ今回はAさんとBさんとCさんだけ、あとの家族は次回ということになります。組長さんが公平な人ならともかく、そういう人ばかりでもなかったようですから、揉め事も多かったようです。

リレー連載 <213>

わたしの大好きな絵本

ゆめちゃん(NPO こどもすぺーす柏 ポレポレ)

我が家の子どもたちが大好きだった本、第一位、「おばけのバーバパパ」！バーバパパはフランス語でわたあめの意。わたあめのように自由に形を変えられて、奇想天外に活躍するバーバパパ一家に子どもたちは夢中でした。なかでも音楽の大好きなバーバラと愉快的バーバモジャが大好きでした。自分のことのように思うのかな？

シリーズになっていて、図書館中のバーバパパの本を読みました。

図書館のすぐ近くに住んでいたの、好きなだけ読めました。おかげで想像力豊かな人に成長し

『おばけのバーバパパ』

アネット・チゾンとタラス・テイラー

訳：山下明生 偕成社

ました。(・・・それは確か。本が人を創るってほんとですね。)

今でも私のラインのスタンプでバーバパパ一家が活躍しています。スタンプ押すたび、我が家の寝る前の絵本タイムを思い出します。

大切な、大切な時間でした。

